

# ひみつのおともだち



ひみつのおともだち

作・絵  
相澤慶子



つき　よる  
月のきれいな夜でした。

「ふ～、やっとできたわ」

かあ　うえ  
お母さんは、ソファの上で

う～んと　のびをしました。

うえ　ぼり　けいと  
テーブルの上には、かぎ針と、毛糸。

いま  
そしてたった今　できたばかりの

いぬ  
ふわふわの　犬の　あみぐるみが、

み  
こちらを見つめていました。





「おかあさん、これ作<sup>つく</sup>ったの？」

翌朝、まさと君<sup>くん</sup>があみぐるみ<sup>み</sup>を

見<sup>み</sup>つけて だっこ<sup>み</sup>しました。

「うん、ゆうべ作<sup>つく</sup>ったの。」

「かわいい。この子<sup>こ</sup>、

ボンド<sup>なまえ</sup>って名<sup>な</sup>前にする。」

こうして犬<sup>いぬ</sup>の あみぐるみ<sup>み</sup>は、

ボンド<sup>なまえ</sup>という 名<sup>な</sup>前<sup>まえ</sup>になりました。



いつもまさと君<sup>くん</sup>とボンド<sup>なまえ</sup>は、一<sup>いっしょ</sup>緒<sup>あそ</sup>に遊<sup>あそ</sup>びました。

でも男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>だから、遊<sup>あそ</sup>び方<sup>かた</sup>もやんちゃ<sup>あそ</sup>です。

お兄<sup>にい</sup>ちゃんのひでと君<sup>くん</sup>と 遊<sup>あそ</sup>ぶ<sup>あそ</sup>ときに、キャッチボール<sup>あそ</sup>の

ボール<sup>あそ</sup>がわりに され<sup>あそ</sup>てしま<sup>あそ</sup>ったこと<sup>あそ</sup>もあり<sup>あそ</sup>ました。

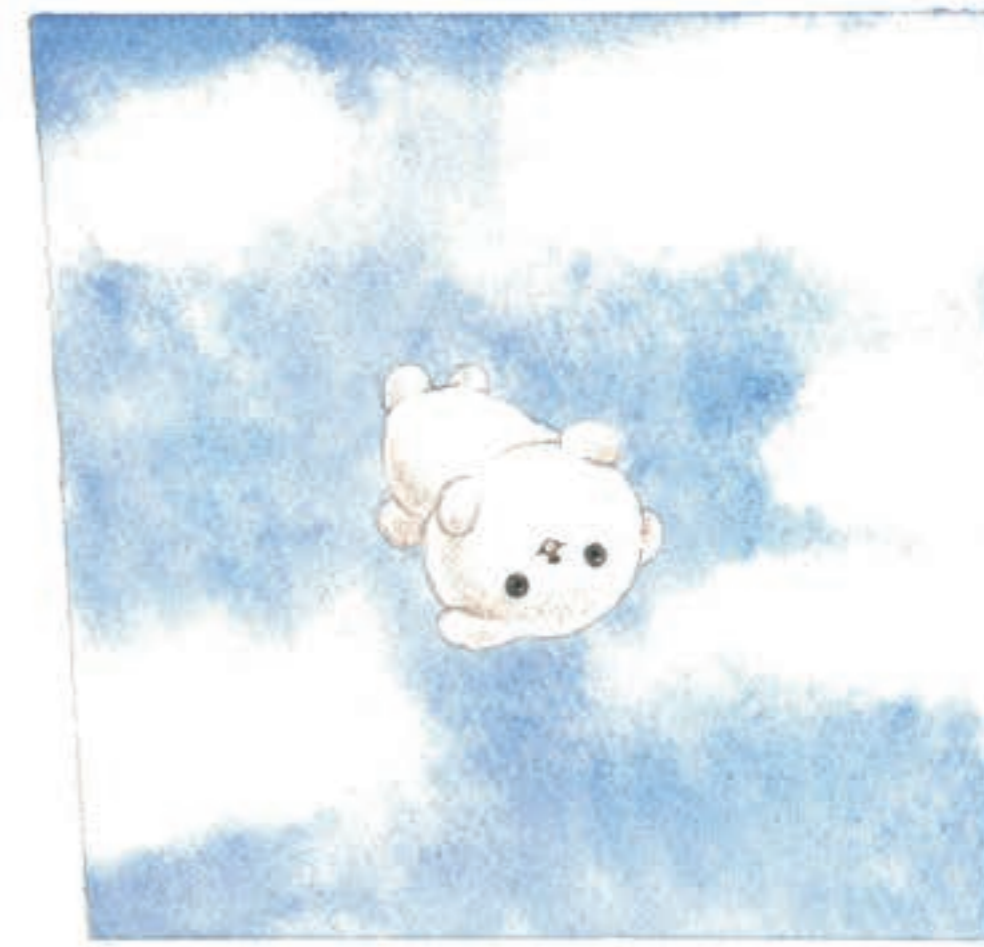
まいにちの  
「毎日楽しいけど、  
ちょっと疲れちゃったな…。」

ある日、ボンドは窓辺で  
外の景色を眺めていました。  
庭には、たくさんのたんぽぽが  
咲いています。

「きれい…。」  
ボンドはもっと近くで  
たんぽぽを見ようと思って、  
窓に近づきました。



そのとき、ふわあっと大きな風がふいて、  
ボンドはたんぽぽ畑のなかへ落ちてしまいました。



「どうしよう……。」

う  
生まれてはじめて

そと で  
外に出ってしまった ボンドは、

とまどいました。

でもさわってみると、

たんぽぽは ふわふわで、

いい<sup>きも</sup>気持ち。

と 飛んできた <sup>わたげ</sup>綿毛のひとつが、

ボンドのしっぽに くっつきました。

「ふふ、くすぐったい。」



<sup>わたげ</sup>「綿毛かと思ったら、<sup>おも</sup>違<sup>ちが</sup>ったわ。」

<sup>みあ</sup>ふと見上げると、<sup>はね</sup>羽<sup>は</sup>の生えた女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>が  
<sup>た</sup>立っていました。

<sup>きみ</sup>「君<sup>だれ</sup>は誰？」

「わたしは、<sup>ようせい</sup>妖精のココ。」

「ぼくは、ボンドだよ。」

「ボンド君、<sup>くん</sup>一緒<sup>いっしょ</sup>に遊<sup>あそ</sup>んでくれる？」

ボンドとココは、たんぽぽ畑のなかで たくさん遊びました。

花かんむりを作ったり、綿毛をどこまで飛ばせるか 競争したり…。



不思議な女の子と たくさん遊んで、

気がつくとき、日が暮れていました。

「どうしよう、ぼく、

帰らなきゃ……。」

おうちを見上げた

ボンドの目から、

涙がこぼれ落ちました。

ココは言いました。

「わたし、お友だちがほしかったの。」

その様子を見て、ココが言いました。

「遊んでくれてありがとう。」

お礼に、願いをひとつだけ

叶えてあげる。」

「ほんとう！？

じゃあ僕、ひでと君 まさと君のいる、

あのおうちに 帰りたい。」



「じゃあ、目をつむっていてね。」

ココがそう言うと、

たんぽぽの綿毛が 大きくなり、

ボンドを 包みはじめました。

ボンドはふわりと 空を飛び、

窓から おうちのなかへ 入りました。

「ありがとう、ココ！…あれ？」

ココの姿は、もう ありませんでした。



いえ  
家のなかでは、まさと君が  
泣いていました。

「ボンドがどこかへ

いっちゃったよう……。」

「ぼくはここにいるよ！」

ボンドは ぴよんぴよん とびはねて、  
まさと君の胸に とびこみました。

「ボンド！」

よる ね まえ  
夜 寝る前に、ボンドはまさと君に  
妖精の女の子のことを 話しました。

「またココに会いたいなあ……。」

ボンドが言うと、まさと君は、

「じゃあ、その子がおうちに

来てくれるように、

小さいソファを

置いておくのはどう？」

と言いました。







よくじつ  
翌日、まさと君は お父さんとお母さんに ボンドとココのことを話し、  
ちい  
小さなソファを作<sup>つく</sup>ってほしいと たのみました。

とう かあ かぐや ちい ちゅうもん  
お父さんとお母さんは、家具屋さんに 小さなソファを 注文しにいきました。

しばらくして、できあがった

ちい  
小さなソファが おうち<sup>とど</sup>に届きました。

とてもていねいに 作<sup>つく</sup>られている

ソファ<sup>み</sup>を見て、みんな大<sup>おお</sup>喜<sup>よろこ</sup>びです。

「これで、妖精<sup>ようせい</sup>さんも来<sup>き</sup>てくれるかな？」

まさと君<sup>くん</sup>が、わくわくしながら

い  
言いました。

にい くん  
お兄<sup>にい</sup>ちゃんの ひでと君<sup>くん</sup>が、

てがみ か  
お手紙<sup>てがみ</sup>を 書<sup>か</sup>いてくれました。





つき  
月のきれいな夜<sup>よる</sup>でした。

まど<sup>は</sup>  
窓に貼<sup>て</sup>られている手紙<sup>がみ</sup>を

み  
見つけたココは、

いえ<sup>なか</sup>  
家の中にそっと入り、

すわ  
ソファに座<sup>ま</sup>りました。

「わあ、なんていい気<sup>き</sup>持ち。」

そして、ふわふわの

ソファ<sup>うえ</sup>の上で

とびはねてみました。



ものおと<sup>め</sup>  
物音にふと目を覚<sup>さ</sup>ましたボンドは、リビングにやってきました。

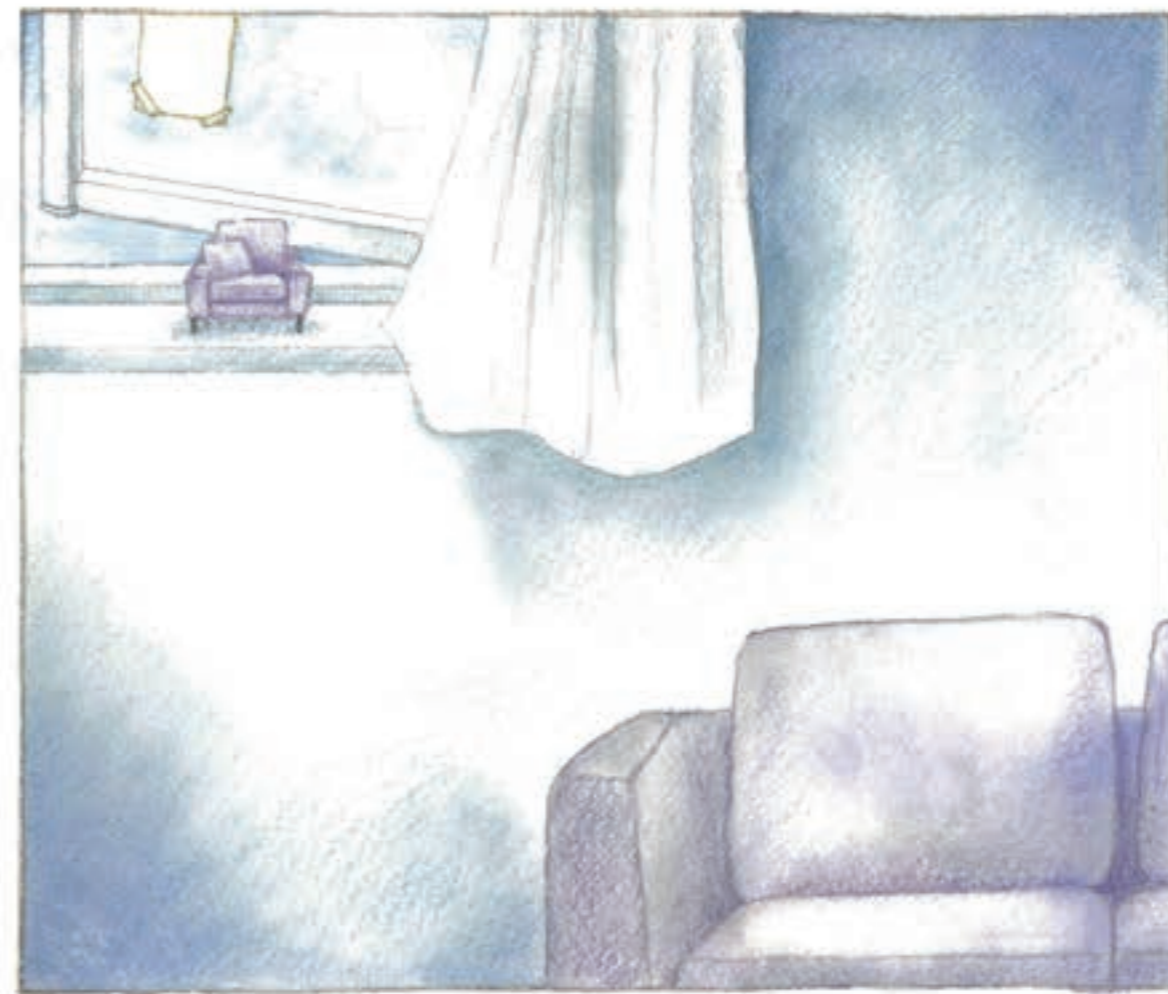
そしてココの姿<sup>すがた</sup>を見<sup>み</sup>つけました。

「わあ、ココ、ぼく<sup>ま</sup> ずっと待<sup>ま</sup>ってたんだよ！」



それからというもの、  
妖精のココは <sup>ときおり</sup>時折  
<sup>あそ</sup>遊びにくるようになりました。

<sup>かぞく</sup>家族のみんなは、その<sup>ようす</sup>様子を  
ほほえましく <sup>みまも</sup>見守っていました。



<sup>まどべ</sup>窓辺には <sup>ちい</sup>小さなソファが  
ちょこんと <sup>お</sup>置かれているので、  
<sup>おとず</sup>訪れた人は <sup>ひと</sup>みんな  
<sup>ふしぎ</sup>不思議がるのでした。  
でもそれは、この<sup>かぞく</sup>家族だけの  
たいせつな<sup>ひみつ</sup>秘密でした。



<sup>つき</sup>月のきれいな夜、<sup>よる</sup>耳をすますと  
<sup>ようせい</sup>妖精の足音が <sup>あしおと</sup>聞こえてくるかも  
しれませんよ……。

**NOYES**  
SOFA100%

2025年2月22日発行

著者 相澤 慶子

発行者 株式会社NOYES

第10回 NOYES 絵本コンクール ZIP 賞作品